

〈コバケンのわが祖国〉

Kobaken's My Fatherland

指揮とお話 小林 研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

コンサートマスター 依田真宣 Masanobu Yoda, concertmaster

スメタナ: 連作交響詩『わが祖国』より

Bedřich Smetana: Excerpts from "Má Vlast"

第1曲: ヴィシェフラド(高い城) Vyšehrad (The High Castle)

第3曲: シャールカ Šárka

— 休憩 Intermission (約15分) —

第4曲: ボヘミアの森と草原から From Bohemia's Woods and Fields

第2曲: ヴルタヴァ(モルダウ) Vltava (Moldau)



2/4

第75回

休日の 午後の コンサート

2/4(日) 14:00 開演 東京オペラシティコンサートホール

Sun. February 4, 2018, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト: ハラダチエ



出演者プロフィール

指揮とお話 小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker



©K. Miura

東京藝術大学作曲科および指揮科を卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクールでの鮮烈な優勝を飾ったのを皮切りに、世界的に活躍の場を拡げ、現在も国内外の第一線で活躍を続けている。

特に、ハンガリーでの活躍は目覚ましく、その功績に対してハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位となる星付中十字勲章、ならびにハンガリー文化大使の称号が授与されている。また、国内では文化庁長官表彰、旭日中綬章を受けている。

作曲家としても数多くの作品を書き、1999年には日本・オランダ交流400年の記念委嘱作品、管弦楽曲『パッサカリア』を作曲、ネーデルランド・フィルで初演されると、聴衆から熱狂的な喝采を以て迎えられた。同作品はそれ以降も様々な機会に再演されている。

精力的な音楽活動の他に、各種媒体への寄稿などエッセイの執筆も行っており、その繊細で情感豊かな語り口でマルチな才能を発揮している。既刊の書籍には、『指揮者のひとりごと』（騎虎書房）、『小林研一郎とオーケストラへ行こう』（旬報社）がある。

現在、日本フィルハーモニー交響楽団桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、読売日本交響楽団特別客演指揮者、九州交響楽団の名誉客演指揮者等を務めるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団音楽監督、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授の要職にある。

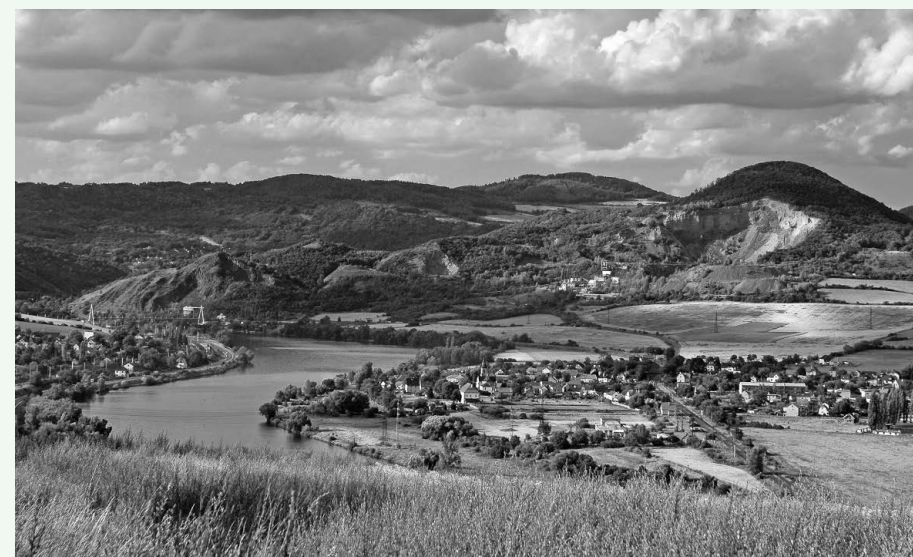
プログラム・ノート

解説=柴田克彦

今回の「休日の午後のコンサート」は、「コバケンのがが祖国」。本シリーズにもたびたび登場している人気指揮者、小林研一郎が、チェコの象徴ともいえるスメタナの連作交響詩『わが祖国』の楽曲を披露します。

ハンガリーをはじめ東欧で活躍してきた小林研一郎は、チェコとも浅からぬ関係にあります。かつてチェコ・フィルの常任客演指揮者を務め、1997年には『わが祖国』のCDも録音。これは同楽団が外国の指揮者とこの曲を録音した初の例となり、1999年には日本ツアーでも演奏して圧倒的な感銘を与えました。そして2002年には、チェコ国民にとって重要な「プラハの春」音楽祭のオープニングコンサートの指揮を東洋人では初めて受け持ち、チェコ・フィルと共に『わが祖国』を演奏。この公演を任されたのは、彼がチェコの魂を理解していることの証しといえるでしょう。

マエストロは同曲を東京フィルをはじめとする国内オーケストラでも再三演奏していますが、毎日が雄弁で熱い名演。円熟を極める今のコバケンが、いかなる演奏を聴かせてくれるのか? 大いに楽しみです。



ボヘミアの山々

Photo by Ladislav Renner / CCCR-Czech Tourism

チェコ国民主義音楽の祖、スメタナ

ベドルジーハ・スメタナ(1824-1884)は、チェコの国民的な音楽を、クラシックの分野で最初に築いた作曲家。“チェコ国民主義音楽の祖”と呼ばれています。

同国ボヘミア地方のリトミシュルに生まれた彼は、ビール醸造業を営む父が3回の結婚で得た18人の子供の内、11番目に生まれた長男(!)でした。父親がたしなむヴァイオリンをすぐに真似して4歳で同等の腕前になり、ピアノを習うと6歳にして公の場で弾くなど、幼少から才能を発揮。作曲も7歳の年から始めています。学業に関しては紆余曲折あったものの、16歳のときリストの演奏を聴いて感銘を受け、音楽家を目指します。プラハでピアノと理論を学び、1847年には音楽学校を開こうとして、面識のないリストに相談。意外にも激励の手紙をもらい、1848年プラハに音楽塾を開校します。これが結構当たり、同年に幼い頃から顔見知りのカテジナと結婚しますが、1854、55、56年に、次女、長女、四女が相次いで亡くなります。そこで心機一転。1856年から1861年までスウェーデンのエーテボリで指揮者、ピアニストとして活動します。その間、妻カテジナも死去。ただ1860年には16歳年下のバルボラと再婚し、二人の娘を得ています。

1861年に祖国へ戻ると、オーストリア帝国支配からの独立運動の真っ最中。ドイツ語しか話せなかった彼は、37歳にしてチェコ語を勉強することになります。そして祖国愛が沸々と高まり、創設を推進した国民劇場(最初は仮劇場。このオーケストラでヴィオラを弾いていたのが、チェコの国民音楽を国際化させたドヴォルザークです)のためのオペラに挑み、1866年初演の第2作『売られた花嫁』で大成功を収めます。彼は劇場の指揮者も務め、続いて『ダリボル』『リブシエ』『2人のやもめ』を完成。ところが難聴を患い、1874年に聴覚を失ってしまいます。公職を辞した後は、最初の妻との娘「プフィー」がいる好環境の家で作曲に専念。『わが祖国』や弦楽四重奏曲第1番『わが生涯より』等の名作を生み出します。しかし脳も変調をきたし、精神病院で60年の生涯を閉じました。葬られたのは、『わが祖国』の1曲目に名が刻まれたヴィシエフランド墓地。ここにはドヴォルザークも眠っています。



ベドルジーハ・スメタナ
(1824-1884)

チェコ国民の祖国愛の象徴『わが祖国』

『わが祖国』は、聴覚を失う直前にあたる1872年から構想が開始され、1874年から1879年にかけて順次完成された全6曲の連作交響詩です。全曲通しの初演は、1882年11月5日プラハで行われ、曲はプラハに献呈されました。交響詩という形態は、創始者であるリストの影響で採用されたものですが、内容自体はきわめて民族的な独自のテイスト。チェコの歴史や自然の題材の中に祖国への愛が込められた音楽です。本作は、オーストリアの支配下にあった国民を大いに鼓舞し、スメタナの代表作のみならず、国を象徴する存在となりました。そして今も、スメタナの命日=5月12日に開幕する「プラハの春」音楽祭の初日に必ず演奏されるなど、特別な扱いを受けています。

全曲は第1曲冒頭の主題で関連付けられると同時に、各曲単独でも成立しています。今回は、第1~4曲が一部入れ替えて演奏されますが、全体像と流れを知っていただくため、曲順に全曲をご紹介します。(以下「」内はスメタナ自身による標題の要約)

第1曲: ヴィシエフランド(高い城) [1874年作曲/1875年3月14日初演]

プラハの南、ヴルタヴァ河畔にある城の名。「高い城」を意味していますが、本来は固有名詞です。「伝説の吟遊詩人がヴィシエフランドの岩を眺めて、豎琴の響きを思い浮かべる。ヴィシエフランドが栄光の中で喜び立ち、王と公爵たちの祝典に、騎士たちの勝利の歌がこだまする。しかし激しい闘争が起こり、王たちは没落。ヴィシエフランドは荒廃し、見捨てられる。そして吟遊詩人の追憶の豎琴が響く」。

まずはゆったりとした部分。吟遊詩人の豎琴を表わす2台のハーブがカデンツァ風のフレーズを奏で、その中で6曲全体の基本主題が示されます。この主題が繰り返されながら



Photo by Aleš Motejl / CCCR-Czech Tourism

力を増した後、激しい闘いの場面に移り、ベートーヴェンの「運命」交響曲の動機も登場。最後は遅い音楽に戻り、追憶のハーブが響きます。なお同曲だけは、スメタナの耳が聞こえる内に大部分が書かれました。

第2曲: ヴルタヴァ(モルダウ) [1874年作曲/1875年4月4日初演]

ボヘミア地方の中心を流れる川の名。頻りに単独演奏されているおなじみの名曲です。ただしモルダウはドイツ語名で、チェコ語ではヴルタヴァ。「2本の水源が合流して流れ出し、川幅を増しながら、森の狩、婚礼の踊り、月の光と妖精の舞い、聖ヨハネの急流、プラハ市内、ヴィシェフラドを経て、遠くへ去っていく」。



Photo by Jaroslav Mareš / CCCR-Czech Tourism

2本のフルートで源流が示され、クラリネットが吹くもうひとつの流れと合わさって川になります。次に奏されるなめらかな旋律が、川の流れを表わすメイン主題。ちなみにこの旋律の元は、イタリアの歌ともスウェーデンの歌ともいわれており、現在のイスラエル国歌のベースにもなっています。続いてホルンが森の狩の角笛を表し、楽しく弾む田舎の婚礼の踊り、夢見るような月の光と妖精の舞い、突然激しい音楽となる聖ヨハネの急流、メイン主題が明るく奏されるプラハ市内、堂々としたヴィシェフラドと場面が変わっていきます。

第3曲: シャールカ [1875年作曲/1877年3月17日初演]

古代チェコの伝説の勇女の名。プラハ北東の地名にもなっています。「恋人に裏切られて、男への復讐を誓うシャールカは、自らを木に縛り付けて苦しむ芝居をする。ツィラート率いる兵士たちが近づき、彼女の美しさに魅せられたツィラートは、縛を解いてやる。シャールカは兵士たちを酔わせて眠らせる。やがて角笛を合図に、隠れていたアマゾネス(ギリシャ神話に登場する女戦士たち)が襲いかかり、彼らを皆殺しにする」。

厳しい主題で始まり、兵士たちの行進曲が続きます。クラリネットがシャールカ、ファゴットとチェロがツィラートの主題を奏で、二人は対話します。民俗舞曲風の宴会の場面が静まると、ホルンの合図をきっかけに、アマゾネスの襲撃を描いた激しい音楽となり、クライマックスを形成します。起伏に富んだ劇的な1曲です。

第4曲: ボヘミアの森と草原から

[1875年作曲/1876年12月10日初演]

タイトル通り、祖国の美しい風土の描写。「ボヘミアの風景を眺めたときの感情が描かれている。牧場や森から喜びや悲しみの歌が聞こえてくる。ホルンが描く森、エルベ河畔の谷あいなど、ボヘミアの森と草原は、心に感慨を抱かせる。聴き手は自由に風景を描くことができる」。



Photo by Jiří Jirousek / CCCR-Czech Tourism

伸びやかな主題に始まり、クラリネット(牧場)、オーボエ(村の娘たちとその歌)、ヴァイオリン(牧場のなごみ)、ホルン(森)の旋律が続きます。これらの主題が展開され、チェコ発祥の舞曲ポルカも登場。華やかに盛り上がり、さらにテンポを速めて終結します。全曲の中では牧歌的な音楽です。

以下は、今回のプログラムに含まれていない曲。

第5曲: ターボル [1878年作曲/1880年1月4日初演]

ボヘミア南部の町の名で、1415年に処刑された宗教改革者フスの意思を継ぐ人々の拠点。「フス団の賛美歌『汝らは神の戦士たれ』が全体のモットー。これは強い意志、勝利への願い、不屈の粘りへの讃仰を表す」。

讃美歌に基づく主題が変奏されながら、激しい闘いが描かれ、勝利のクライマックスに至ります。

第6曲: ブラニーク [1879年作曲/1880年1月4日初演]

ボヘミア中南部の山の名。愛国の戦士たちが眠り、祖国の危機の際には目を覚まして国を救うとの言い伝えがあります。「『ターボル』の続き。祖国を救うときを待っていた勇士たちが目覚めて出陣し、新たな栄光がボヘミアを包む」。

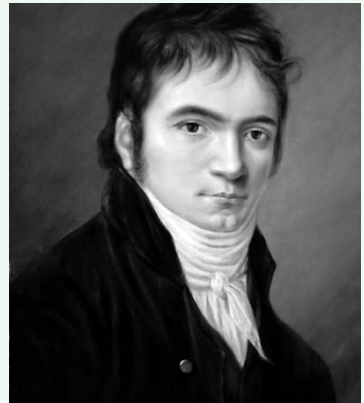
前曲同様に「汝らは神の戦士たれ」が用いられ、その主題提示から、牧歌的な休息、戦いと行進を経て、ヴィシェフラドの主題をまじえた輝かしい終結を迎えます。

最後の2曲も感動的な音楽ですので、コンサートやCD等で、ぜひ耳にされることをお勧めします。

Follow UP!

失われゆく聴覚と戦った偉大な作曲家

耳の病を患った作曲家といえば、ベートーヴェンの名が思い浮かびますが、スメタナの状況もかなり悲劇的。その発端は、幼少の頃に至近距離で火薬が爆発したことにあります。当時は衝撃で2日間耳が聞こえなくなったとのこと。そして18歳から耳が遠くなり、46歳からはまわりにも難聴が知られ、50歳の1874年には全く聞こえなくなりました。つまり彼は、国民的な人気を集めた『わが祖国』の演奏を耳にすることができなかったわけです。また1876年に書かれた弦楽四重奏曲第1番『わが生涯より』では、ヴァイオリンで「キーン」という高音が奏されます。これは失聴の始まりを告げた耳鳴りを表しており、聴くと痛ましい思いに駆られます。



ベートーヴェンも28歳ころから難聴に悩まされていたという

しかし一方で、このことが作曲に専念する時間をもたらしたのは、悲しいけれども1つの事実。『わが祖国』は、それゆえに生まれた名作といえなくもありません。実際彼は、同曲や2つの弦楽四重奏曲といった代表作、4つのオペラ(1つは未完)など、失聴後に少なからず作品を残しました。この実績もまたベートーヴェン同様であり、その精神力に感服させられます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。近著に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。